

チュートリアル報告 I

山内明美（言語社会研究科博士後期課程）

はじめに

全5回におよぶチュートリアルの取り組みは、大変有意義なものであった。学部生から教えられることの多い半期間だった。

博士に進学して思うことは、専門分野を越えた領域で、各々の研究について議論することが極めて難しいことである。その「議論の難しさ」が教養課程の欠如に由来するということについて、もっと真剣に考えられていいと思う。多様な学知がひしめき合う大学の中であるにもかかわらず、教養基盤が脆弱であるために建設的な知の構築が貧弱にしかたされえないことは、自分自身の問題だった。

全5回のチュートリアルでは、それぞれのテーマに即して、ディスカッションの時間を多くとるようにした。各自が持ち寄ったテーマは「死」「自殺」「記憶」「戦争」「エロス」「道徳」「社会」「世間」などであったが、学部を越えて哲学的な問いについて議論する機会は、たとえ大学の中とはいえ、少ないであろう。参加学生は社会、法、経済、商の全学部にわたっていたが、哲学的な問いを基底に分野を越えて議論するということの面白さや問いを深めるということの経験はもっとあっていい。

実施報告

全5回チュートリアル経過概略

第1回 ガイダンス、資料・文献検索についての解説

課題①：レポートの仮テーマを決め、文献表を作成する

第2回 第1回課題の報告、テーマ設定とアウトラインの作成についての解説

課題②：最終レポートのテーマを決定する

第3回 第2回課題報告とチュートリアルからのコメント、引用文献と形式についての解説

課題③：チュートリアルからのコメントをもとにアウトラインの作成

第4回 第3回課題報告ディスカッション・論文（レポート）の構成についての解説

課題④：最終レポート構想

第5回 第4回課題報告とディスカッション、論証についての解説

第2回以降、ひとつの講座の構成は、課題報告、ディスカッション、チュートリアル
の3部構成で実施した。受講学生の時間割の都合にあわせ3コマ開講。火曜5限6人、
6限1人、木曜4限1人の計8人を担当。

学生の論文8テーマ

- 日本の都市社会における「世間」への意識——ニーチェの「奴隷道徳」にも関連して
- 「異常な」性と死
- 戦争の記憶をどのように受け継ぐか——原爆の記憶の継承を中心に
- ニーチェの超人思想について
- 今、日本人がキルケゴールから学ぶべきこと——高い自殺率を継続する日本
- 日本人の死生観
- ニーチェにとっての西洋社会・近代社会とは何か
- 『存在と時間』から読み取る、ハイデガー哲学の現代教育への示唆

チュートリアル報告書の事例

担当の藤野寛先生には、毎回チュートリアルレジュメの他に、業務報告書を提出した。
以下は第2回目チュートリアルの業務・経過報告書である。

第2回業務報告書 [実施日 2009年6月2・4日]

第2回チュートリアルの概要

課題提出 仮テーマと文献目録作成についての各自の報告→課題に対するコメント

参考文献の書き方、テーマ設定について、論文の構成要素、アウトラインの書き方についての解説を
行った。

1回目、2回目とチュートリアルを経過し、今後ディスカッションの機会を増やそうと思いはじめて
いる。報告されたテーマはどの学生も、自己の対峙する問題意識を、ニーチェ・バタイユ・キルケゴール・
アドルノ・アーレントなどと重ね合わせつつ、「社会」の中で生きる「自己」を見つめようとするテー

マが多かった。仮テーマとはいえ、それぞれ強い思い入れがあるようで、「テーマ設定の理由」をみんなの前で話すことに気恥かしさを感じながらも、自分のテーマについて、生き生きと話していたことが印象深かった。もっとも、それぞれの報告テーマ自体は、半期間のレポートで書くにはかなり壮大ではある。一橋大学は社会科学を専門領域にしているが、哲学科があるわけではない。普通の学生生活の中で、哲学を基底に「真面目」に語り合える機会は、決して多くはないだろうと思う。多くの選択科目がある中で「ドイツ語圏思想」を受講しに来る学生が、自己とは切り離せない切実な問題意識を抱えながら参加していることに気づかされ、同時に感動を覚えた。チュートリアルに関わることで、学生から貴重な機会を与えていただいている。

[仮テーマの報告]

(→以下に書いた各自のコメントは、山内がかなり矮小化してまとめている)

火曜5限クラス 参加学生6名

Aさん：「ニーチェの超人思想について」

→受験勉強をしながら、ニーチェを読んでいた。大衆社会のニヒリズムということが言われていて、ニヒリズムに陥りたくないなとぼんやり考えていた。受験勉強をするにも何とか自分を納得させる口実のように、ニーチェを読んで「超人思想」に興味を持った。

Bさん：「キルケゴールの実存主義思想から得られる、没個性的現代日本の課題と現代日本で生きる意味、そして可能性」

→キルケゴールの議論と現代日本社会、自分の身の回りのことを関連付けて考えてみたい。

Cさん：「戦争の記憶を継承する」

→団塊の世代と言われる自分達は、経済成長に飲み込まれ「戦争の記憶」や戦争責任という問題についてなおざりにしてきてしまったのではないかと語られ、実際にCさん自身にもそのような意識があった。

Dさん：「日本人の生死観」

→民俗学的な要素をあわせもった観点から、生死観を考えたいと思った。文献を検索すると「終末医療」や「ホスピス」に関する資料が多かったが、そうではないところで考えたいと思った。

Eさん：「文学作品における“性と死”のイメージ」

→バタイユ『眼球譚』、三島由紀夫『仮面の告白』、村上龍『限りなく透明に近いブルー』と、直観的には相反すると思われる“死”のイメージと恍惚の極においては限りなく接近し、そこに美質を感じるというエロティックな文学作品は、洋の東西を問わず枚挙にいとまがない。どうして私たちは

“性と死”という矛盾する2要素の接近を美しいと思うのか、その理由について調査、考察を行いたい。

Fさん：「現代社会における「奴隷道徳」について」

→大衆が大衆を嫌うということについて、あるいは日常生活の中で繰り返される「あなたのために思って」という言われ方に抵抗があった。ニーチェの奴隷道徳について考えてみたいと思った。

木曜4限クラス 参加学生1名

Gさん：「ユダヤ系知識人はナチズムから何を見たのか——ナチスの施策の振り返りと併せて」

→ハイデガーやアーレント、レーヴィットの議論を遡って、ナチズムとは何だったのかを考えてみたい。町村ゼミでのテーマとして個人的に関心があることは、芝浦の賭殺業の聞き取り調査をやりたいと思っており、最終レポートをどうするか、迷っている。

テクニカル・ライティングのまとめ

具体的な論文指導にあたっては、以下のような概念図を明示しながら、解説を行った。

引用・参考文献

- ・戸田山和久,2002,『論文の教室』NHK ブックス
- ・社会学評論スタイルガイド <http://www.gakkai.ne.jp/jss/jsr/JSRstyle.html>

テクニカル・ライティングのまとめ

1、基本コンセプト

*論文の基本

1. 論文執筆という行為→問いを設定し、分析し、解答を出すこと
2. 分析を科学的に→思考や主張を誰にでも共有できるかたちで出すこと
3. オリジナリティのあるのが論文。調査報告（レポート）は別

<やってはいけないこと>

- ・ 問いがない→対象設定が不明確（「環境問題について」など）
- ・ 分析がない、答えがない→調べたことをただ書いている、請け売りで自分で考えていない
- ・ 科学的でない→自分の信念を論拠なしにひたすら主張する

2、テーマ設定

*「自己の意欲と実現可能性の接点」

*自分の能力で研究可能なテーマを、できるだけ具体的に、限定して設定

*問いを具体化するのがテーマ

(「環境問題」→「××市のごみ収集条例制定過程における市民団体の役割について」)

<やってはいけないこと>

- ・抽象的ないし広すぎる(「アジアについて」など、自分の頭で考えていない)
- ・実現不可能(研究資料がないなど)

3、方法

*誰にでも共有できる科学的方法→自然科学の方法を真似る

1. 数量化
2. 定式化(数量化や数式の代用)
3. 概念定義(定式化の前提)
4. 比較(実験の代用)

*できれば政治学/経済学/社会学など先行研究分野の方法を借りること

*総合調査、ケーススタディ、歴史研究、文献調査、実地調査などのアプローチ

4、仮説と計画

*実行の「地図」としての仮説(特に作業仮説)と計画

*問い→作業仮説→計画→調査実行→修正した作業仮説→修正計画→調査実行というフィードバック

*プランと実行のくりかえしで、自分の問いと思考を具体的に把握してゆく

5、調査

*文献調査と実地調査

*中心になる該当テーマの「よい本」を1冊入手し、それを使い倒す→該当テーマの概要がわかる

*「よい本」の書誌から芋づるで本を探す、反論本も入手→該当研究分野の基本がわかる

*専門図書館を利用して探す、まず図書館の棚の前に立ってみる(「東京ブックマップ」など利用)

*「文献カード」「読書カード」を作る

6、叙述

*論文執筆の目的を明確に把握し、基本枠組みをつくる

1. 問いと仮説(作業仮説でなく立証ないし反証する仮説)を宣言する→自分のやりたいことを宣言
2. 対象を設定(具体的に、「なぜこの対象なのか」→自己の問いに最も適当な対象)

3. 使用する基本概念を設定（「健全」「個性」「活性化」「民主化」、1つか2つのキー概念
 4. 方法を設定（学問分野／先行研究→自己の研究の位置確認、「なぜこの方法なのか」）
- *「仮説を立証してゆく」叙述、「仮説（俗説）を反証してゆく」叙述

7、構成

- *「問い（序論）→分析（本論）→回答（結論）」、「起承転結」「序破急」などではない
- *序論で「問い」「仮説」「対象」「基本概念」「方法」などの舞台設定をやる
- *本論は立てた問いにしたがい、仮説を立証してゆく
- *結論は本論の分析をふまえて、序論の問いに解答を出す
- *執筆前に構成表をつくり、すべてが「問い」に関係しているか自分で検証すること

8、文章

- *問いに科学的に答えるのが論文の文章→名文である必要なし
- *問いに関係のないことを書かない、自分でわからない（設定できていない）言葉は使わない
- *それぞれの章、節、段落、文はそれぞれ1つの任務を負って存在→問いに関係のないものは思いきって除く

哲学／実践のはざままで

受け持った講座では、学生の「哲学」へ対するスタンスというものが、ふたつにくっきりと分かれた。ひとつは、現実社会の中で生き抜くためにニーチェやキルケゴールを実践への理論として扱う立場、もうひとつは、「社会」や「近代」に批判的検討を加え「哲学」を志向するという立場の学生である。前者は学部1年生、後者は2、3年生にあたる。

ディスカッションの中で、やはり3年生から1年生に対して「ニーチェを社会に順応する、実践で使えればいいんですか」という類の問いが出された。質問をされた1年生は困惑して何も言えなくなるということもあった。

課題と反省

正直に告白すれば、私のチュートリアルは、学生が一生懸命考えてきたテーマやアウトラインについて、一緒になって一生懸命考えるという作業に尽きてしまった。各自がそれ

なりに自己と切り離し難い切実な問いを持って来てくれたこととそれぞれの報告やディスカッションには素朴に感動さえ覚えた。そもそも哲学や思想に興味を持って授業を選択する学生は、ゆっくりと自己や社会のあり方について思考したいと思っているようだ。このことは、実際に学生に接してみte気づいたことで、「論文の書き方」というテクニカルな解説をすることよりも、自身にとってはずっと学ぶべきことが多かった。正直、こんなに積極的に意見が出たり、熱心に授業に参加するとは思っていなかった。また、チュートリアル実施中の期間は、学生からの個別の質問メールを常時受け付けるようにしており、学生にもよるが概ねそれぞれ週2、3回ほどのメールのやり取りを行っていた。質問内容の多くは、最終レポートのテーマ設定に関する相談とどのような先行研究、参考文献があるのかという問い合わせであった。

技術的なことと言えば、「学部生は図書館の使い方が分からない」という印象を持った。教養への一番簡単なアプローチは「図書館」に行くことであり、第一歩は「読む」という経験の積み重ねであろうが、そのためにも入学してから早い段階で教養科目に関わるどの授業でも、学生の図書館利用やその方法についてフォローする必要があるだろうと思う。

山内明美（やまうち・あけみ）

言語社会研究科博士後期課程2年

専門分野：歴史社会学、民族主義、ナショナリズム

論文「自己なるコメと他者なるコメ——近代日本の
＜稲作ナショナリズム＞試論」（言語社会研究科紀要
『言語社会』第2号）など